

ホンデュラスにおける視聴覚教材利用に関する教員研修 —看護教員の指導技術の強化に向けて—

林 徳治・黒川 マキ*

The Report on Teacher Training for Audiovisual Materials
in the Republic of Honduras
— With the Aim of Developing Nursing Education —

HAYASHI Tokuji, KUROKAWA Maki*
(Received December 17, 2003)

キーワード：視聴覚教材、教材開発、教員研修、教育方法、国際協力

本稿は、中南米に位置するホンデュラス共和国 (Republic of Honduras) において、看護系教員および婦長などを対象に行った視聴覚教材作成にかかわる技術移転の教員研修について報告したものである。本研修は、受講者は異なるが2002年度、2003年度と2年にわたり取り組むことができた。今年度は、コンピュータ利用による教材の開発を加えた教授技術の基礎基本に重点を置いた技術移転をめざし、前年度より継承し改善した研修プログラムを実施した。研修事後にアンケート調査を行った結果、受講者からより高い評価を得ることができた。その要因は、2002年度の研修で得られた反省より、講師が受講者の課題意識やニーズを事前に把握し、講師側の意図した課題ではなく受講者自らが課題を設定し実施した点によるところが大きい。また、受講者の多くが視聴覚教材の作成および授業への適用に極めて高い関心を示し、本研修はその動機付けに大きく寄与することができた。

1. はじめに

ホンデュラス共和国は、中米地峡のほぼ中央に位置し、バナナとコーヒーの栽培を主要産業とした熱帯性気候の国である。人口は約610万人、面積は日本の約3分の1となっている。またホンデュラスは、中南米地域の中でも最も開発が遅れている国の一つであり、開発ニーズが高いため日本からの援助も幅広い分野で行われている。

筆者(林)は、2002年に引き続き2003年10月19日～27日、国際協力機構(JICA: Japan International Cooperation Agency)の短期専門家として本国を訪れた。派遣の目的は、看護教育の強化に向けた教員研修の実施と評価である。具体的な活動は、看護教員や婦長を対象にOHP (overhead projector) やコンピュータなどを利用した視聴覚教材の作成およびその活用にかかわる技術を移転することである。看護師の人材育成の場で視聴覚教材を用いることは、看護実習の事前に学生の知識を具象化させる上で効果的かつ効率的な方法である。教材の開発が遅れており教育資材の乏しい本国においては、限られた環境の

*大阪学院大学

中でいかに教材を有効活用していくかという点が教員に求められる最も重要な能力であるといえる。

2. 教員研修の概要－2002年実施－

本研修は、2002年度も同一目的の活動を実施しており、課題や改善点を2003年度の研修方法や内容に反映して取り組むことができた。そこで、以下に前回実施した研修活動について概要を述べる。

(1) 研修方法・内容

前年度実施した教員研修の概要は、次のとおりである。

〔日時〕 2002年4月2日～4月5日（4日間）

〔場所〕 首都テグシガルパ市

〔対象〕 看護教員、病院婦長ら女性59名

研修は、4日間の日程で講義および15名前後のグループ別による演習が取り入れられ、主にワークショップ形態として実施された。講義では、教育的コミュニケーション、プレゼンテーション、視聴覚教材の重要性および特性について知識を強化した。演習では、視聴覚機器の一つとしてOHPを利用した教材作成に重点を置き、作成した教材により模擬発表であるマイクロプレゼンテーション（micro presentation）をグループ別を実施し受講者同士で相互評価を行った。マイクロプレゼンテーションとは、発表の時間、内容、規模を縮小すなわちマイクロ化し、グループ内で全員が交互にプレゼンテーションを実施かつ相互評価を行うことによってその技術向上を図るものである。発表は、テーマを筆者らの提案した「看護師にとって必要な資質・能力」に統一し、発表時間を一人5分として実施した。

なお、任国はスペイン語を母語としていたため、研修全般において通訳の協力を得て講師と受講者間のコミュニケーションを図った。

(2) 研修成果

研修成果については、受講者に対して実施した事後アンケートにより分析した¹⁾。アンケートの有効回答率は78.0%であり、受講者59名のうち46名の回答を得ることができた。

アンケートのうち研修に対する満足度の調査は、満足した度合について選択肢（80%以上、70%～79%、69%以下）と、その理由について自由記述により行った。選択肢による

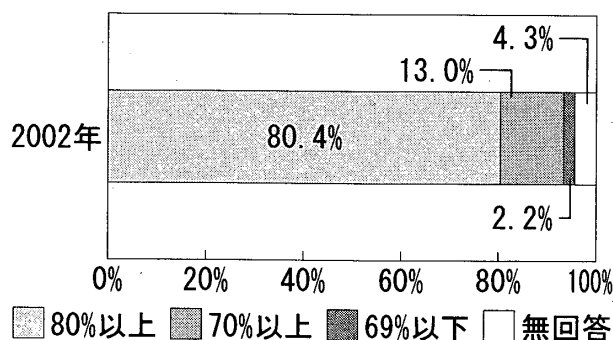


図1 研修に対する満足度

調査結果は、図1に示すとおり80%以上の満足度を示した者が37名(80.4%)、70%以上が6名(13.0%)、69%以下が1名(2.2%)、無回答が2名(4.3%)であった。

満足度の要因は、自由記述の内容より分析した。結果、満足度が80%以上の者に共通して見られた回答は、研修内容が個々の既習知識・技術の強化に有益であったこと、とりわけ演習において獲得した内容のうち、個々のプレゼンテーションの相互評価を通して他者からの指摘により改善点が明確にされたことや、改善を加えた教材を用いて再度プレゼンテーションを実施したことにより知識・技能の定着が強化されたことがあげられていた。その他、演習を通して創造性が強化されたこと、受講者間の知識が共有できたことについても満足した要因としてあげられた。

満足度が70%以上の者は、研修内容に概ね満足しているものの、時間的規制による教材作成の限界を指摘していた。共通した回答として、OHP教材に限定された研修に加え、補完的にコンピュータを利用した教材作成について実習を交えたかったとの意見が見られた。また、研修は首都で実施されたが、受講者の中には地方からの参加者も多く含まれていたため、地方においては資材等の供給が困難であり研修成果が現場で十分活かし得ない環境下であることが今後の課題として残った。

満足度が69%以下の者は1名であったが、「教材作成の限界を感じた」と記述していた。これは、事前に演習に使用する材料の通知がなかったため、資料不足により会場で配布したもののだけでは満足のいく教材が作成できなかつた点にある。なお、研修内容やマイクロプレゼンテーションを取り入れた研修方法に関しては、概ね有用性が認められた。

(3) 研修課題

2002年度に実施した研修では、OHPに重点を置き演習を行ったが、受講者からは研修終了後にコンピュータを利用したプレゼンテーションソフトによる教材作成を希望する声も多く聞かれた。しかしながら、任地の物理的環境等の問題からプレゼンテーションソフトについてはデモンストレーションをするにとどまった。また、ホンデュラスは中南米諸国の中でも最貧国の一つであるため、職場に十分な設備が整わず受講者全員が研修内容を個々の職務に活かすことができるとは限らない。それ故、任地では教材作成・活用の技術向上よりもむしろ印刷物などによる資材供給が最優先されるべきという声が聞かれた。

3. 教員研修の概要－2003年実施－

次に2003年度の研修について概要を述べる。研修の目的は、前年度と同様であり前回とは異なる受講者を対象として行われた。また、今年度も母語であるスペイン語への通訳を通して講師と受講者間のコミュニケーションを図った。

(1) 研修方法

今年度実施した教員研修の概要は、次のとおりである。

[日時] 2003年10月20日～10月23日(4日間)

[場所] 首都テグシガルパ市

[対象] 看護教員、病院婦長ら女性54名

研修は、前年度と同様に講義と演習を取り入れたワークショップの形態で行われた。講義において3方向の教育的コミュニケーションやプレゼンテーションに関する知識強化を

図り、演習ではグループ別に OHP およびプレゼンテーションソフトを利用した教材を作成しマイクロプレゼンテーションを実施した。筆者は、ワークショップの実施に先立ち、看護センター所長および次長らと本研修の指標について共通理解を図った。研修に関する確認事項は次のとおりである。

- ① 看護教育のあり方について、受講者が自ら考え実践し評価する
- ② 教育的コミュニケーション（フォーマル教育では教師と学生間、インフォーマル教育では看護師と患者や市民間を対象とする）の活性化を図る視聴覚教材の設計と開発・評価を習得する
- ③ コンピュータなど IT (Information Technology) を活用した教材開発およびプレゼンテーション技術を習得する
- ④ ワークショップ終了後に成果と今後の課題を明確にして次年度へ継承する

(2) 研修内容

本研修では、受講者が看護の実践者であると同時に教育者でもあった。そのため、前述した②の確認事項より演習の際にはフォーマル教育とインフォーマル教育のグループに分け、作成した教材を提示する対象者を明確にした上でプレゼンテーションに取り組めるようにした。グループは4つに分かれ、各グループは13名前後で構成された。また発表テーマについては、前年度の統一したテーマとは異なり、受講者個々の有する専門性やニーズを尊重した上で看護教育に関するテーマを各自が設定することとした。

演習活動では、図2に示す流れでプレゼンテーションが実施された。

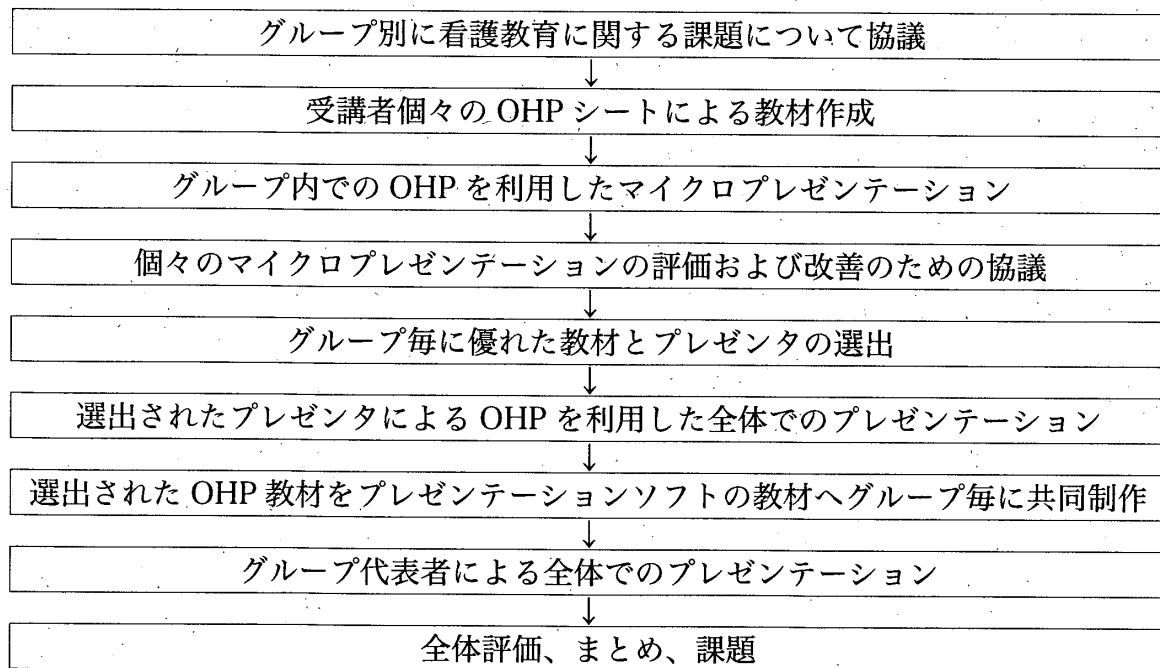


図2 ワークショップにおけるプレゼンテーションの流れ

今年度は、前年度に得られた課題や知見を踏まえて、他者への表現・伝達手段としての視聴覚機器には OHP だけでなくコンピュータ利用による教材作成を取り入れた。グループ内の個々の発表では、教材作成のための時間的制約により OHP を利用して教材を作成

した。次に、各グループから選出された代表者による全体発表ではコンピュータ（プレゼンテーションソフト）の利用により教材を作成した。研修会場では、グループ毎に1台（計4台）のコンピュータを利用した。コンピュータがグループ毎の共同利用となったのは、研修会場の物理的環境によるためであり、また本国では個人へのノートパソコン普及率も低いことから持参することは難しい。

教材作成にあたっては、テクノロジーブッシュによる単なるソフトウェアの操作技術の研修に偏ることなく、教材設計の基礎基本となるコンテンツや評価など教育的側面を重視した。すなわち、コンピュータの機器操作ではなく、OHPや印刷教材などあらゆる教材作成に不可欠な能力として教材設計および評価内容や方法の習得に多くの時間を費やした。そのため、コンピュータを利用した教材の作成方法については、操作技術の習得を基本的な内容にとどめた。ワークショップの様子を図3～図6に示す。

グループ内でのマイクロプレゼンテーションを経て、A～Dの4グループから選出された代表者によるプレゼンテーションのテーマは次頁の通りであった。受講者は、グループ毎の発表テーマに基づき、教材をOHPからプレゼンテーションソフトへ発展させた。教材の作成過程は、グループワークにより受講者間の知識・技術の共有に有益であった。



図3 OHPシートによる教材作成



図4 プレゼンテーションソフトによる教材作成

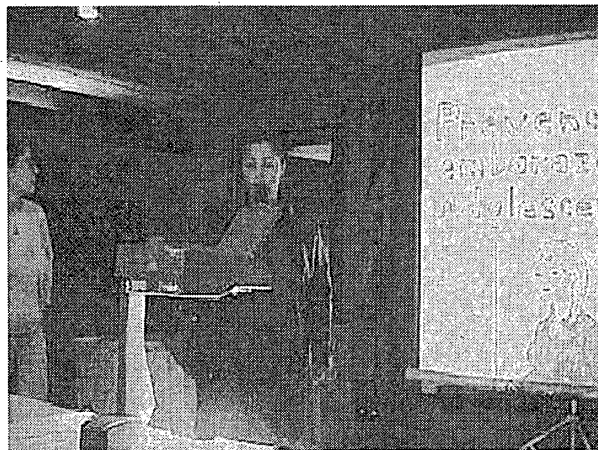


図5 OHPによるグループ内発表



図6 プレゼンテーションソフトによる全体発表

- A グループ： 早期妊娠の影響（フォーマル教育）
- B グループ： 家庭内暴力（フォーマル教育）
- C グループ： エイズの予防（インフォーマル教育）
- D グループ： 障害教育（インフォーマル教育）

本研修を通して、グループでの協議からは以下のようなコメントがあげられた。

- ・ OHP やコンピュータ等各視聴覚機器の特徴を活かした教材作成技術を習得できた
- ・ 教材を構成する文字、絵図、写真、表などの配置、色、大きさ、提示手順などについての基本を習得できた
- ・ プレゼンテーション技術の訓練方法であるマイクロプレゼンテーションについて、Plan（計画）－Do（実施）－See（評価）－Improvement（改善）の過程の意義や役割を理解し習得できた
- ・ 教材の評価内容や方法、改善過程の重要性を理解し習得できた

4. 事後アンケートの調査結果

本研修の成果を把握するため研修の事後にアンケートを実施した。調査は自由記述により行い、(1)研修への期待、(2)満足度とその要因、(3)意識・態度の変容、(4)研修の進行の4項目について行った。アンケートは、受講者54名のうち50名の回答を得ることができ92.6%の有効回答率であった。なお、回答のうち一人が複数の内容について記述している場合は、それぞれの内容を1件として回答件数に含めた。以下、各項目の調査結果について述べる。

(1) 研修への期待

受講者が研修に期待することについて、自由記述により調査した。調査より得られた回答を表1に示す。上位の回答を見ると、受講者は視聴覚機器全般の活用について高い期待をもっていることがわかる。視聴覚機器のうち、特にコンピュータを利用したプレゼンテーションソフトの習得に高い関心があり、OHP に対する関心とは差が見られた。また、技術面の習得や強化を期待するものが全回答のうち70%以上を占めたが、職場で活かしていけるよう知識面の習得や強化を期待するものも約20%あった。

表1 研修への期待

	件数	割合
視聴覚機器の活用	14	17.9%
プレゼンテーションソフトの習得	13	16.7%
プレゼンテーションの改善	12	15.4%
視聴覚の知識強化	7	9.0%
新しい知識の習得	7	9.0%
職場に活かす	6	7.7%
教材作成	5	6.40%
OHP の習得	4	5.10%
コンピュータの習得	3	3.80%
教材作成の知識	2	2.60%
無回答	5	6.40%
合計	78	100.0%

(2) 満足度とその要因

受講者の研修に対する満足の度合いを選択肢（80%以上、70%～79%、69%以下）により調査した。結果は、図7に示すように80%以上の満足度を示した者が40名（80.0%）、70%以上が10名（20.0%）、69%以下および無回答は見られなかった。

さらに、満足した要因について自由記述により調査した。記述により得られた回答を表2に示す。プレゼンテーションソフトや OHP の操作技術の習得および視聴覚機器全般に関しての活用や理解が上位の回答として全体の60%以上を占めた。これは、OHP に限定

して行った前年度の研修から、今年度はプレゼンテーションソフトへと発展することができた点において受講者の関心や満足度が高まったと考えられる。また、教材作成の技術改善や設計・計画手法の習得といった回答については、教材作成に向けた設計・計画過程の重要性を理解できた点、評価の過程において個々の改善点が明確にされた点が満足した要因と考えられる。本研修は、OHP やコンピュータ等視聴覚教材を作成する過程として Plan (計画) - Do (実施) - See (評価) - Improvement (改善) の研修方法を取り入れた結果、受講者の知識理解等の認知面から成果を上げることができた。

表2 満足した要因

	件数	割合
プレゼンテーションソフトの習得	27	31.0%
OHP の習得	19	21.8%
視聴覚機器の活用・理解	8	9.2%
視聴覚の知識強化	7	8.0%
プレゼンテーション技術の習得	6	6.9%
教材作成の技術改善	5	5.7%
設計・計画手法の習得	5	5.7%
デジカメの操作習得	4	4.6%
コンピュータの活用	2	2.3%
評価による欠点把握	2	2.3%
実習継続の必要性	1	1.1%
無回答	1	1.1%
合計	87	100.0%

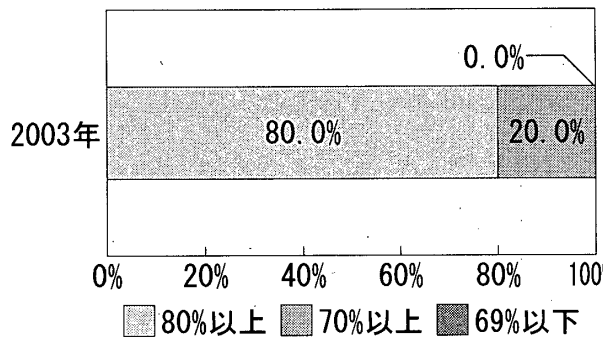


図7 研修に対する満足度

(3) 意識・態度の変容

研修後の受講者の意識および態度の変容について自由記述による調査を行った。記述により得られた回答を表3にあげる。

最も多かった記述は、研修を通して動機付けられ日常の教育実践に適用できるというものであった。研修で習得した知識や技術を職場に活かすことにより実習を継続していくことが、プレゼンテーションをより発展・改善していくために必要であり、継続することが課題である点についても述べられた。また、研修への期待度が低かった OHP に関しては、演習を通して OHP が好きになった、関心が高まったという記述が見られた。これは、OHP シートを切り貼りしたり重ね合わせたり、絵図を描く等工夫を凝らすことによって非常に動的な提示が可能となり、独創性のある教材が容易に作成できた点にあると考える。

(4) 研修の進行

講師による研修の進行について自由記述により調査した。記述により得られた回答を表4にあげる。

本研修は、母語がスペイン語であったため通訳を介してのコミュニケーションであったが、受講者は容易に理解することができ研修全般を通してスムーズに進行することができた。そのため、講師による進行の仕方は優良であったとの記述が多く得られた。筆者は、

スペイン語に関して無知であるため一部の者からスペイン語で話してほしいという記述もあったが、これは否定的なものではなく友好的な感情によるものと捉える。

また本研修では、受講者をフォーマル教育とインフォーマル教育に分類し、プレゼンテーションの対象者を明確にした結果、聴き手（相手）を意識した教材設計の重要性や、自己の教材を利用したプレゼンテーションを通して評価実施の重要性が習得されたと確信する。

表3 研修後の意識・態度の変容

	件数	割合
習得した知技の職場への適用	13	24.1%
実習継続の必要性	9	16.7%
プレゼンテーションの必要性	4	7.4%
OHP への関心増	3	5.6%
評価による気づき	1	1.9%
教材工夫の必要性	1	1.9%
グループワークの必要性	1	1.9%
非言語の重要性理解	1	1.9%
無回答	21	38.9%
合計	54	100.0%

表4 講師による研修の進行

	件数	割合
優良	32	37.6%
通訳で理解できた	10	11.8%
スペイン語で話してほしい	7	8.2%
適切な指導であった	6	7.1%
実践的・動的であった	6	7.1%
信頼・安心できた	4	4.7%
専門性があった	4	4.7%
講師のプレゼンが良好	3	3.5%
準備が行き届いていた	3	3.5%
質疑応答できた	3	3.5%
時間配分はよかった	2	2.4%
日本への関心高まった	2	2.4%
無回答	3	3.5%
合計	85	100.0%

5. 今後の課題

以上、述べてきたアンケートの調査結果は、主に肯定的な意見について分析したものである。今回の調査項目には改善すべき点についての記述部分を設けてなかったが、回答者50名のうち33名（66.0%）は、調査項目を問わずいずれかの箇所に不満や改善点等の指摘をあげていた。特に、コンピュータの機器不足に対する指摘が多く、本研修で各グループに1台の割合で利用したコンピュータに関してはより多く台数が必要であった。

さらに、グループ内約13名の受講者は、短期間の研修であったため時間が不足し個々が機器に触れる機会を十分もつことができなかった。次に多く見られた意見は、研修で習得した OHP やコンピュータ利用による教材作成を職場での実践に活かすことが困難な点についてである。受講者の多くは、本研修で教材作成やプレゼンテーションの重要性に動機付けられ高い意欲を示しているが、視聴覚機器が職場に整備されていない等物理的な環境

表5 研修に対する指摘

	件数	割合
コンピュータの不足	23	45.1%
時間の不足	9	17.6%
職場での適用困難	9	17.6%
個人実習が必要	4	7.8%
グループ構成、人数が多い	3	5.9%
ファシリテータが必要	3	5.9%
合計	68	100.0%

問題を避けることができない。

最後に、アンケート結果より得た内容と筆者の知見をもとに今後の課題について述べる。

① 継続した研修の開催

現行では、次回のワークショップ開催が2004年度であるが、受講者へのフォローアップの重要性から年1回の開催は継続していく必要がある。また、受講者の職場での活動をモニタリングしていくことも授業技術のより効果的な改善手法として期待できる。

② オリジナル教材の開発・配布

本研修では、ビデオ、CD、印刷物を講義の提示用教材として使用した。これらの教材は、看護センターがコアになり、各地域の看護教育担当者へ配布することにより受講者の自学自習が可能となる。また、自学自習することによって次回以降スムーズにワークショップに移行することができる。地域によっては、電気がないこともあるため、印刷教材やテキストなどを充実させ配布できるよう工夫する必要がある。

③ 研修の機会均等をめざした取り組み

本研修に参加できなかった看護教育担当者のためには、各地域で同様の研修を開催することが望ましい。そのため、看護センターがコアとなり、研修の普及を目的としたファシリテータ等人材育成に取り組む必要がある。

④ コンピュータ関連の設備充実

今回の研修においてもコンピュータの不足は大きな問題であった。今後、看護センターに研修用として2～3人で1台のコンピュータが利用できる環境が整備されればより一層効果的な研修が期待できる。また、研修のためのオリジナル教材の開発や情報蓄積のために必要な機材を充実させ、将来的にはセンター内のネットワーク化を図りたい。

⑤ 視聴覚・コンピュータ教育等メディアの専門家派遣

本研修の内容・方法は、看護教育に限らず小中高大学の各教育機関において教員研修やインフォーマル教育を対象とした指導者の育成に広く貢献できる。そのため、総合的・複合的な領域や視野からみた教育専門家を派遣することが求められる。

筆者は、コンピュータ等視聴覚機器に対して単なるデモンストレーションや憧れに終わることなく、視聴覚教材や教授技術の研究・開発の発展につなげることを意図した。本研修において、教材作成→プレゼンテーションの実施→相互評価を一貫して実施し、受講者に対する動機付けや意欲向上を試みた結果、好ましい評価が得られたと考える。また、受講者の要望や不満は、今後の研修の方向づけに有益となるものであり、研修に対する受講者の真の意識や熱意を表したものとして真摯に受け止めたい。

【引用文献】

- 1) 林徳治・黒川マキ：「ホンデュラスにおける看護教育強化としての視聴覚教材に関する教員研修」、『日本教育情報学会第18回年会論文集』、2002. 8、PP.268-271

【参考文献】

- ・国際協力機構：JICA 事業の地域別取り組み、
<http://www.jica.go.jp/about/torikumi/index.html>